Cinema

田中麗奈が映画『幼な子われらに生まれ』で見せた、母の強さと家族の絆

スタイリスト：井阪恵（dynamic dynamic）　ヘアメイク：WANI（orange）

重松清の傑作小説を映画化した話題作『幼な子われらに生まれ』

再婚同士の夫婦、会社員・信（浅野忠信）と専業主婦の奈苗（田中麗奈）は奈苗の二人の連れ子と４人家族で暮らす。奈苗の妊娠を機に、思春期の長女が信に対して否定的な態度をとり始め、家庭はギクシャクし始める。良き父になろうと懸命な信と新しい命を育むことに希望と不安を抱く奈苗。ツギハギだらけの家族がぶつかりながら絆を求めていく。

不器用な大人たちの戸惑いや悩みを、役者からリアルな演技を引き出しながら見事に描き出したのは『しあわせのパン』『繕い裁つ人』の三島有紀子監督。

様々な家族のあり方が生まれ、それぞれのしあわせの形を感動的に描いた重松清の同名の小説が、あらゆる層に共感を呼ぶ映画となった。

家族は、いろいろあってもひとつのチーム 大変だからこそ、気づくこともあると思う

映画『幼な子われらに生まれ』は、ちょっと複雑な家族−バツイチ同士で再婚した信と奈苗とその連れ子二人−の物語。田中麗奈演じる専業主婦の奈苗は、栗色の髪にやわらかなメイク。ちょっと甘えたトーンの話し声で、母性的なタイプの女性だ。信との間の子供を妊娠したことを思春期の薫に悪気なく告げてしまったことで父娘の関係はギクシャクするが、娘の反抗に動揺する信に対して奈苗はどこかおおらかというか鈍感。田中麗奈の知的で凛としたイメージからは、ちょっとギャップのある役どころだ。

「奈苗は全ての女性に共感される女性じゃないかもしれない。けれど、本当は家族を築こうと努力している女性だと思います」。

奈苗のキャラクターを客観的に語る。演技に入る時は、いつもこんな風に役の人物像を深く分析するそう。

「演じる役にすべて感情移入するわけじゃないんです。奈苗という女性にもいいところとそうでないところ両方あって。ここは好き、ここはどうかな…と思う部分もあります。でも、映画を観た人から『奈苗のことが好きじゃない』と言われると傷ついてしまう自分もいて、そこは不思議な感じですね（笑）。奈苗は家庭を守るいい母親で、そのことが彼女の強さ。引きずらないし明るい笑顔がある。それは社会でバリバリ仕事をする女性とはまた違う強さだと思うんです」。

傷つきながらお互いの関係が化学変化を起こし、家族は彼らだけの絆を見つけていく。

「性格も違う人間同士が一つの家で家族として暮らすことにはいろいろあると思うんです。チームだから、まとまるためには気遣いや努力も必要ですよね。でもたいへんだからこそ何かに気付くこともあるし。いろいろな人にこの作品を観ていただいて、自分の家族と重ね合わせられるところを見つけて何かを感じてもらえたらうれしいです」。

Profile 1980年福岡県出身。98年に映画「がんばっていきまっしょい」で初主演。日本アカデミー賞新人俳優賞など多数受賞。以降、映画を中心にドラマ・舞台と幅広く活動。公開待機作に日台合作『おもてなし』（仮）がある。

©2016「幼な子われらに生まれ」製作委員会

監督／三島有紀子　出演／浅野忠信、田中麗奈、宮藤官九郎、寺島しのぶ他　8月26日（土）テアトル新宿、シネスイッチ銀座ほか全国ロードショー　配給：ファントムフィルム

Special cross talk

彫刻家・名和晃平が、グランマーブル祇園2階のカフェ・サロンを設計

世界的に活躍する彫刻家・名和晃平が、グランマーブル祇園の2階に新しくオープンするカフェ・サロンの設計を手がける。名和晃平のアートにとどまらない幅広い活動の拠点となっているのが京都・伏見のサンドイッチ工場跡をリノベーションしたSANDWICH。スタジオ、オフィス、レジデンス施設を備え、様々なジャンルのクリエイターと学生とスタッフが共に創造するクリエイティブ・プラットフォームだ。グランマーブル代表取締役・山本正典がその場を訪ね、ものづくりについて語った。

山本　名和さんのアーティストとしての活躍は存じ上げていたんですが、ベルギーの振付師 ダミアン・ジャレとのパフォーマンス作品『VESSEL』がご縁で関わりをもたせていただきました。名和さんがとてつもなく実験的な、しかも商業ベースには乗りづらい作品に挑戦されていることに共感しました。

名和　グランマーブルさんの Gallery PARCは、大学で教えている学生が展覧会をしていたこともあり、以前より知っていました。お会いする前から意外とつながりはあったんですよね。

山本　今回は、グランマーブル祇園2階のカフェ・サロンのデザインでお力を借りたいと思っていますが、名和さんの中で建築は、どんな位置付けですか？

名和　アート・建築・デザインという3本の柱の中では、あくまでもアートが中心ですが、アートで培ったものが建築やデザインの領域に染み出しているようなイメージです。中でも建築については本格的に挑戦したいと考え、約4年前に SANDWICHに建築チームを発足させました。これから世界中でプロジェクトを行いたいと思っています。

山本　名和さんが SANDWICHでやっていらっしゃることにはアートの世界での使命感や、若手への還元というコンセプトがあるように感じられます。しかもそれに対して全く気負いを見せられない。

名和　使命感や気負いというよりも、“今・この場所”が面白くなればいいなと思っています。それが京都、日本、アジアへと広がってゆけば良いですね。

山本　グランマーブルはクリエイティブを応援するのがコンセプトで Gallery PARCは若手アーティストのステップになれるような存在でありたいという趣旨でやらせていただいています。学生たちや若い作家たちが何かを求めているのを自分も一緒に探しているというか、それが僕の中では面白いし刺激になっています。彼らはまだない価値観を探しだそうとしている。それに関わることは自分にとっても学ぶことが多いです。学びを積み上げていくことが文化になるだろうと思うし、それはブランドを価値あるものにしていくためにも必要なものだとも思います。

名和　アートと商業とは別のロジックで生まれていると思います。アートは商業主義のルールからエスケイプできる場所であり、新しい価値に挑戦したり、時代を映す鏡にもなります。だからこそ、世界の企業のトップがアートにハマるのではないでしょうか。一方、現代社会においては、アートがコマーシャルなサイクルに飲み込まれて薄っぺらくなってしまう危険もあります。その点、京都はそういった流れに巻き込まれず、いい距離感で世界と関われる場所だと感じています。

山本　その京都、グランマーブル祇園でのカフェ・サロンのデザインではいろいろと無理も申しますが…。

名和　今回は、山本さんの「こうなったらいいな」というイメージを形にしていくお手伝いをできれば良いと思っています。１階の店舗との接続も考えて、最小限の手の加え方で最大の効果を得られたらいいなと思います。

Profile 名和晃平 1975年生まれ。彫刻家、京都造形芸術大学教授。2009年、京都に創作のためのプラットフォーム「SANDWICH」を立ち上げる。2011年、東京都現代美術館で個展「名和晃平 - シンセシス」を開催。独自の「PixCell」という概念を軸に、ビーズ、発泡ポリウレタン、シリコーンオイルなど様々な素材とテクノロジーを駆使し、彫刻の新たな可能性を拡げている。近年は建築や舞台のプロジェクトにも取り組み、空間とアートを同時に生み出している。

グランマーブル祇園に、カフェ・サロンがこの秋デビュー

グランマーブル祇園、ショップの2階に、シャンパンとマーブルデニッシュを楽しめる、カフェ・サロンが誕生します。花街・祇園の大人な雰囲気を、世界的に活躍する彫刻家・名和晃平のデザインによる洗練されたインテリアの中で楽しんでいただける空間です。シャンパン以外のお飲み物、デニッシュのアレンジメニューも登場予定。ショップデータはp10

Art

217..NINAの新しい表現。樹脂の中のカリフォルニアの風景

グランマーブル祇園の座敷と坪庭にふんわり浮かぶように展示された、ヤシの木やビーチのシルエット。217..NINAの写真をアーティストの岩波智之が樹脂に封じ込めたコラボレーション作品だ。「せっかくお互いが日本とアメリカの生活を経験しつつ、現在はカリフォルニアという大好きなヤシの木と海イメージの街にいて、その魅力を和の空間で展示したら面白いのでは？というところから企画は始まりました」（217..NINA）。写真はあえてモノクロで。影絵のような映像が樹脂に覆われてよりリアルに見え、滑らかなテクスチャーには気泡や揺らぎが現れる。「写真が透明な樹脂で透ける事によって、一気に不思議な空間ができたと思います。Tomo君が海をイメージして気泡を入れるバランスも絶妙でした」。

TOMO IWANAMI×217..NINA「CALIFORNIA SILHOUETTES」は、写真のほか映像や音楽とのミクストメディア展示として、グランマーブル祇園にて4月23日〜5月14日に開催された。

Profile: 217..NINA　鹿児島県出身。L.A. を拠点にファッションやアートの世界をリミックスする「写心家」。姉はシンガーのAI。（写真右）
岩波智之（TOMO IWANAMI） 1979年ニューヨーク生まれ、慶應義塾大学卒業後、アパレルデザイン、空間デザイン、ショートフィルムの監督、制作など幅広く活躍するクリエイター。（写真左）